

令和4年11月9日
福井県教育庁

令和4年度 第1回福井県総合教育会議 結果概要

◆ 主な意見

○知事

- ・一つのチームとして、情報共有しながら、一人一人の子どもたちに対応して、ケースを積み重ねていくことで、対応が早くなるとわかった。
- ・教育のあり方としてポジティブに物事を考える大切さを教えてもらった。
- ・あるべき姿として、ほめるばかりでなく、叱ることで濃密な親子関係を築くことこそが愛着につながっていくということも、社会全体として共有しないといけない。

○教育委員

- ・家庭の問題や保護者の考え方、環境が非常に大きい。
- ・スクールソーシャルワーカーが家庭のサポートをしていると思うので、スクールソーシャルワーカーの時間の増加や、地域によって増員するなどの支援が必要ではないか。
- ・不登校児童生徒校内支援事業のモデル校で効果的であるならば、そういった部屋の確保や、運営する先生の増員も必要だと感じた。
- ・自然体験や呼吸法のようなもので心が解放されるなど、子どもたちのために何かとっかかりができないか。
- ・勉強などのストレスが多少かかっても、「こんなに楽しいことがあるし頑張って学校に行こう」と思ってもらえるようなことを、学校全体として考えていってほしい。
- ・担任だけではなく学校全体として、問題になりそうな子がいたらきめ細かく見ていく体制づくりをしてほしい。
- ・育て方というところで、小学校に入るまでの段階において、こども園や幼稚園の相談会で不登校やいじめを起ささないような教育の仕方について連携するなど、取り組みを進めたほうがいい。

○教育相談担当者

<養護教諭>

- ・登校をしぶった児童は教室に入る前のワンクッションとしていったん保健室に入る場合がある。
- ・保健室で気になる児童については、担任および管理職と情報共有しており、スクールカウンセラーも交えたケース会議や家庭相談につながっている。
- ・保護者の価値観が多様化して、無理をして学校や教室に戻らなくてもいいという選択肢も増えてきている。

- ・不登校になる背景として家庭環境も大きく関わっているように感じている。
- ・家庭との連携、学校以外に安心して過ごすことができる場所、人材、社会環境を整えることの難しさを実感している。
- ・不登校児童生徒校内支援事業については、もっと広げてほしい。専門の先生がいることで、不登校の子にも先の見通しができていくと思う。
- ・コロナ禍で保健室の半分は感染症対応ゾーンとしており、安心して過ごせる場所がないため、居場所づくりを今後もさらに推進してほしい。

<スクールカウンセラー>

- ・不登校について低年齢化を懸念している。
- ・子どもにはうまくできなくても生きていくことができるという実感が大事であるが、うまくできないという状況の回避を繰り返すと、子どもにそうした実感をしてもらう機会がなくなってしまう。
- ・保護者には褒める価値と叱って育てる価値の両方を伝えて、子どもに対して適切な関わりをしていただくよう話している。
- ・生徒と直接会えた場合は、教室に戻っていけることが少なくないことも活動の中で実感している。
- ・タブレットを用いてオンラインによる面談が可能になれば、場所や時間がより制限されることなく面談ができるようになると思う。

<スクールソーシャルワーカー>

- ・ケース会議の質が高い学校は、役割分担ができており、解決が早い。
- ・スクールソーシャルワーカーにとって、家庭訪問は1つの技法であり、すべてのケースで必要なわけではない。スクールソーシャルワーカーは関係機関や家庭の中で対応を行うので、ケース会議に呼んでもらいチームで対応することが一番効果的である（訪問のための時間確保や増員に関し）。
- ・保護者に対して、年齢に合った関わり方（スキンシップなどを含めて）をスクールカウンセラーから提案していただきたい。
- ・不登校児童生徒校内支援事業については、段取りや打合せが不可欠であるが、先生たちも苦労しているため、人手の面で配慮をお願いしたい。

<24時間電話相談員>

- ・インターネット社会では文字で情報のやり取りをしているため、電話で相談することは勇気のいることである。相談者に寄り添うことで安心して話してくれていると感じる。